

第3回新しい文化芸術施設の整備に関する検討懇談会 主要発言まとめ

[平成28年3月22日 開催]

項 目	内 容
全 般	<p>「岡山市協働のまちづくり条例」が大幅に改正されて平成28年4月1日から施行される。基本的な考え方として、市と多様な市民が、主体的に、自立して、協働していくというものと受け止めている。今後の検討会についても、この条例の考えに則って、劇場の専門家のグループと利用する市民団体のグループを分けて、より深く議論し、市がそのグループ同士の協働を促進させる役割を担うことが、良い劇場づくりのために必要と思う。</p>
	<p>千日前地区に劇場ができてこそ、岡山市は本格的な新しいまちづくりのスタートに立てると思う。劇場は点ではなく、いかに線や面としての広がりを持てるかによって、劇場の機能や可能性が発揮されると思う。</p>
	<p>事業は劇場から外に向かうことも可能で、周辺の空いている物件を使うことを積極的に考えた方がよい。北九州市も商店街と連携して様々な事業を行っている。周辺地域に目を向けた人材と施設計画を盛り込むということを加えてほしい。</p>
	<p>岡山市民をどのように巻き込むか、来て楽しんでもらうか、あるいは運営に携わってもらえるか、ということをもっと想像しないといけないと思う。整備推進体制の中に、専門的な人材だけでなく、まちづくりや若い人の声を聞きながら進めていけるようなことも加えてほしい。</p>
	<p>新しい文化芸術施設ができると、千日前地区周辺が活かされるのではないかと期待している。ダンスや演劇、美術も建物の中だけでなく、外へ広げていけるので、さらに発展できるようにしてほしい。</p>
	<p>劇場は人が来て初めて成り立つと思う。十分に理解し、楽しむ力や感性を持つ人が増えないと、良い作品や世界的な作品があっても楽しみ方がわからない。岡山市民の感性が高くなっていくと、岡山市にも良いものが集まってくるのではと期待している。</p>
	<p>北九州市の場合は、劇場が信頼されるまで約4年間は公演やワークショップなど、劇場の仕事をしっかりと行い、地域の方々や地域そのものが劇場に対して信頼の目を向けてくれるようになってから、まちとの関係をつくっていった。まちとの関係をどうやってつくるのか、基本計画に盛り込むべき。</p>
	<p>岡山市が新しい施設をつくることは市民の財産であると思う。市民の方々が中心となって運営することは当然である。一方で、公共の劇場や美術館は、日本や世界の公共財であり、様々な人の財産である。そのような観点から、もう少し広い見地で考えると、様々な人や作品が岡山市に来てこそその劇場であると思う。世界からアーティストや作品が岡山市に来てこそ、岡山市の新しい劇場が世界に発信していけると思う。</p> <p>劇場に、若い人が集まるしかけを考えてほしい。良い作品をつくらうとするほど、事前の準備や稽古のために施設が閉まっている（公演のない）日が増えてしまう。公演のない劇場は、徐々に人が集まらなくなるので、人が集まるしかけを今から徹底的に考える必要がある。</p>
事業の考え方	<p>事業内容の記載は、現時点では「事業例」などにしておき、今後、事業の広がりが具体的に考えられると良いのではないかと。事業内容は今後詳細が決まると思うが、ある程度の事例を挙げておいた方がよい。</p>
	<p>現在でも岡山市民は盛んに文化的な活動をしている。アウトリーチも行なっているし、オープンロビーにピアノを置いて演奏するなど、「基本計画（案）」に書いてあることで、すでに行なっていることはある。</p>
	<p>事業の内容は、どこまで詳細に書くのか。事業案とは言え、書かれた事業内容が一人歩きした場合、実施していないと将来的に指摘されることも出てくると思う。20、30年先は分からない面があるので、柔軟性があつた方が様々なことを発想していけると思う。</p>
管理運営の考え方	<p>管理運営と組織体制はそれぞれに考え方が必要な部分である。特に、運営に関して指定管理者制度の導入か直営かを考えるときに、組織のあり方を選択する際の根幹となる部分である。</p>
	<p>劇場は人々が集まる総合的なステーションであり、人が多く集まるということは、一定数のスタッフが必要になるということ。現状では、ビジョンを持った人が専門性と継続性を持ちながら運営していくことや、実際に大学や他の組織や団体と組むことは難しい。非常に多くの人材が必要であり、そのことについて書いておく必要がある。</p>

項 目	内 容
管理運営の考え方	利用者の立場として、舞台芸術の側面をもった表現を行うときに、各ホールの特長や演出が分かる専門技術者がいてくれるとありがたい。
	施設の管理上一番大事になるのは継続性であり、ノウハウの継承が大切な要素である。「専門性の確保」の項目に、このことを追加していただきたい。
	文化事業はキャッシュフローが良く利益が出るものではないと感じている。どのように財源を確保していくかという視点で経営する必要がある。事業の企画力やプレゼンテーション力、スポンサーへのアプローチ、人脈、成果のバックなどの経営的センスにも専門性が必要である。舞台技術だけではなく、経営にも専門性があり、このような専門性をどのように継続的に確保していくかは、岡山市の文化行政の継続性に関わる重要なポイントであると思う。30年後も継続して運営に関わる人間を確保し、世代交代の仕組みを作ることが運営上、一番大事になる。
	アウトソーシングできるところは外注したら良いが、核となる部分は直接しないといけない。どのような運営形態が良いかは、例示しているもの以外にも色々な組合せ等、知恵を働かせたら良い。
	貸館主体のホールの運営と劇場の運営は異なる。指定管理者に任せても、劇場を運営できる人がいなければ意味がない。開館までの準備の段階で、劇場を運営できる人をどのように育成していくのかに関して、書き加えた方が良いと思う。非常に重要な部分。
	ホールで専門の技術者を養成するのが非常に難しい現状である。しっかりとした技術を持っている人が次の世代に技術を教える場が非常に少ない。
	今までは、ホール技術者は舞台の専門家という捉え方であったが、「劇場、音楽堂等の活性化のための取組に関する指針」にもあるように、市民に対しての事業や、プロデュース・演出などへ対応できる能力を身に着けた人が専門家であると思う。岡山市の劇場の考え方として積極的に取り入れてほしい。
施設の機能・規模 (中ホール)	劇場を考える上では、観やすく、作りやすく、使いやすきの3つの条件が大事である。観やすく、作りやすきの面では小規模が良いと思うが、市民団体の活動にとって客席数は非常に大事である。
	市民文化ホールの申請数からでは、現在の席数(802席)より多い希望や需要は把握できない。よって、パブリックコメントで出された意見が重要である。懇談会資料によると、様々な立場で市民の多様な意見が出されている。同じ趣旨の意見は取りまとめたところがあるが、案の800席を境に、小さい方を望む意見は5つ、多くすべきと言う意見は7つである。多くとの意見が多い。この市民の意見を反映させることが大切である。
	動員人数を目指すのであれば、客席数ではなく、ステージ数を増やせばよい。ステージ数を増やすと滞在日数が長くなるため、その分地域との交流やアウトリーチができる機会が増える。
	過去の事例から考えると、1,000席は何とか成立する上限であり、決して良い状態ではないと思う。今回、岡山市では、できるだけ適切な状態で上演できることを考えて客席数を抑えた方が良いのではないかと。設計は客席数の上限が決まった後に、どのように収めるか考えるものである。
	どのような作品を公演するかによって客席数が決まってくる。北九州芸術劇場の場合は、700席ではあるが、作品によって舞台が見えにくい席が最初からあるため、実質的には650席程である。観客は、800、900席になると感情移入しにくいことがある。多くても600、700席までが拡声器を使わないストレートプレイの場合の限界であると個人的に思っている。
	客席数を増やすのではなく、適切な規模の客席で公演回数を増やす方が観客のためでもあり、出演者も育成され、作品自体も成熟していく。100席程のことではあるが、主催者側のための900席ではなく、観客のために客席数を考えていくことも必要ではないかと思う。
	東京で1ヶ月公演すると300~450席では採算が取れず、600席台は必要なようだ。しかも、主催者の営業努力が必要な1ヶ月公演を主体としないといけない。私は、生の声が届く客席数の規模としては700席が適正であると考えている。岡山市に新しく整備されるホールは2つあるので、集客力がある公演の場合は大ホールで行う選択肢もある。
	中ホールは、個人的には700席でも劇場空間が大きくなりすぎると思うが、プロデューサーや制作関係者から、400~450席程の規模で後100席あると赤字にならない、という話をよく聞くので、700席程が妥当ではないか。800席は大き過ぎると思う。

項目	内容
施設の機能・規模 (大スタジオ・練習室等)	大スタジオが、大ホールの主舞台と同程度の面積(18m×18m)だと、稽古を見る人は壁に張り付かないといけない。18m×18mより大きい方が望ましい。
	大スタジオで大・中ホールの稽古をしながら、発表会、公演でも利用するのなら、大スタジオは2つあると良い。そのうえで練習室の大中小も記載している倍以上の数が必要になると思う。
	大スタジオの客席数が200席程度設置できるなら、照明・音響設備の設置が考えられているので、小ホールとして使用頻度が多くなると思う。演劇も音楽もさまざまな形態の公演方法があるので、大スタジオはもう少し大きくしてもよい。
	大スタジオで創造活動が行われ、継続的な稽古が行なわれるとすると、市民の発表利用と重なり、使用できないことがあると思う。小規模な市民の発表を考えたときに、大スタジオだけでなく、大練習室でも発表会を行なえる最低限の配慮をした方がよいのではないか。
	大スタジオが非常に高性能になるようだが、天井高の記載が必要ではないか。
	大スタジオは、「出演者・スタッフ・関係者等の控室を備える」とあるが、楽屋としっかり明記したほうが良い。大スタジオは表現の場として考えるならば、大・中ホールと同様の設備を備えるべきである。
	私が運営に関わった施設では、大ホールの週末の利用とあわせて大スタジオを同時に押さえてしまうため、長期で利用したい創造的な活動には利用できないことがあり、予約の取り合いで大変である。両方が上手く使えるように検討が必要である。
施設の機能・規模 (大スタジオ・練習室等)	新国立劇場の大スタジオの大きさは18m×18mであるが、出演者が登退場するときのため1間ずつ捨てて使っており、稽古では実際の公演の間口が取れていない。出演者が多くなると、スタッフの居場所がなく、壁一列に並ぶことになる。スタジオ内では打ち合わせなど、稽古との同時進行ができない。実際に有効に使える面積として18m×18mを確保してほしい。
	公演を大スタジオで行う場合、観客の動線と、スタッフ等の動線を考えておく必要がある。大スタジオから様々なことが立ち上がってくることを考えると、実際の稽古場はどうするのかについても考えておくべき。
施設の機能・規模 (その他)	スタジオと練習室以外に倉庫があると良い。新しくホールを作るのであれば、運びやすく使いやすい倉庫のあり方も必要。
	様々な海外の劇場を回っているが、どのような設備があるかということよりも、劇場の人が動いてくれることや、意図が伝達されていること、モノがないときに一緒に考えてくれることが重要。人材は人数ではなく、質であり、アーティストから岡山で作品をつくりたいと言ってもらえる劇場にならないといけない。
	楽器庫は各ホールにあるが、大ホールから中ホールにピアノを移動すること等は考えられているのか。理想は、各ホールとスタジオにピアノを最低1台以上設置し、他のホールやスタジオにも移動できるようにしてほしい。
	各ホールや大スタジオの同時使用をするため、音漏れの干渉がないよう、各室の遮音性能を技術的に対応することを記載してほしい。
施設計画 (動線)	将来的にロングラン公演を目指す場合、楽屋には住環境の視点が重要である。これまで見てきたホールの大半は蛍光灯に、白い壁、白いドアなど病院と同じ作りで、ロングラン公演をすると役者が精神的にまいってしまう。住環境をどのように整備するかは最初から計画してほしい。
	もぎり前のロビーについて、大勢の人が並ぶことがあるので、全て建物内に収容できないとしても、安全面から観客の動線を想定することが必要。
	管理運営する職員はあらゆるエリアに短時間で行けることが必要である。中枢になる場所は考えた方がよい。
施設計画 (設備)	最近では客席を使った芝居やしかけが増えてきた。実際に楽屋から客席を通る動線の確認が必要である。客席から舞台までの所要時間や段差の解消、客席への登退場で灯りがもれないこと等、しかけとして最初から想定した方がよい。
	照明設備について、大ホールの高さは30～36尺程になるため、精密な作業を行なう場合は、ブリッジの作業が必須なので、ライトブリッジは最低3本が必要であると思う。中ホールは演劇主体のホールとして、高さは21尺程を想定するならば、アップダウンでの作業も可能なので、ライトブリッジは、大ホールに増やす代わりになくしてもよい。

項 目	内 容
施設計画 (その他)	<p>建物のシンボル性について、建築のもつ力は大きい。建築もアートであり、デザインを過小評価しない方が良い。建物そのものが集客装置である。建物の魅力がなければ、ランドマークやハレの場にもなり得ないと思う。建物の裏と表をどこに向けるかは非常に大事であり、バックヤードを一番目立つ位置に出すべきではない。</p> <p>公共交通からのアクセスの向上は真剣に考えてほしい。終演後では、電車やバスに間に合わないとなれば、公演の最後の方に出て行く観客も多くいる。公演する側としては芝居がつまらないのかと思い、打撃を受ける。劇場からメインの公共機関までのアクセスを考えることが重要である。</p>
事業費などの考え方	<p>助成制度について、継続的・長期的な使用の場合は優先的に予約できるように配慮してほしい。</p> <p>現在の市民文化ホールは、音楽祭や芸術祭に参加する団体に対しての免除制度があり、ホールの利用料金が安くなる。岡山市民会館と岡山シンフォニーホールは免除制度がない。従来どおりに文化団体が活動しやすい支援方法についても、検討してもらいたい。</p> <p>使用料収入の確保について、実際には高い使用料金設定はできないので、収入としては過大に期待できない。</p> <p>外部からの資金の確保について、公的な助成金や補助金は、貸館の場合はほとんど助成されない。文化庁が進めている国全体における文化の発信や創造に役立つ取組や作品でないと、国も助成しないという時代になってきている。それに耐えられるものを企画し、売り込まないと助成金は期待できない。スポンサーに関しても、岡山でのスポンサー獲得は本当に難しく、他地域と比べて、甘いものではない。</p>